
間奏(イプシロン×エレナ)

枯葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間奏（イプシロン×エレナ）

【Nコード】

N1478B

【作者名】

枯葉

【あらすじ】

イプシロン×エレナかなり好きです♪今回の話は、エレナがイプシロンに親切に(?)する話です。アインvsエレナの時に自分を覚えていないアインに対し「コントロールは解けているようね」とエレナが言いますし、多分イプシロン時代には交流が少しあったのではないかと。でもこうすると疾風の女関係が更に複雑化しますよね・・・。

エレナは日課である愛犬との散歩を楽しんでいた。

いつもの散歩コースを一周して、自宅の広い庭で愛犬と戯れていると、

不意に犬がウーッと唸り声を上げた。

「どうしたの？」

犬が勢いよく吠える。

その先——少し離れた場所——に見知らぬ男が立っていた。

犬の声に気付いたのだろう、こちらを見ている。

生気の無い目。

この屋敷であんなにも堂々としているのだから、関係者なのだろうけれど…。

そこへ使用人の恰好をした、銀髪の背の高い女が通りかかった。

「その貴女、ちょっと待って」

「何でしょうか？」

「貴女、あの男を知っています？」

そう言って男の方を示す。

「イプシロンです、エレナ様」

「そう」

名前を聞いてピンと来た。

彼が…例の研究の…。

「分かったわ。ああ、この子をお願いします」

「はい」

吠える犬を宥め、紐をつけると彼女に渡す。

一礼して使用人の女は去って行った。

男の事が気になり、ゆっくり近づいた。

だが彼は相変わらず暗い目をして、顔をこちらに向けているものの、何か他のものを見ているのか、自分を見ているのか分からなかった。

「何をしているの？」

「…」

「あなたに言っているのよ」

そこでやっと、彼と目が合った。すると

「いたぞ！」

「イプシロンの奴、また逃げ出したのか！」

後ろから声がして、

数人の男達が自分を通り越して目の前の彼に飛びかかり、乱暴に彼の腕を掴んで引きずろうとした。が、逆にあっさりとなぎ倒された。

「くっくそっ…」

再びイプシロンに飛びかかろうとする男達。

イプシロンも身構えた。

彼の目は、さっきまで生気が無かったのが嘘のように、鋭い。

「ちょっと、乱暴はおやめなさい」

「すっすみません、お嬢様」

それから彼に近付く。

「イプシロン、落ち着いて頂戴」

すると彼の目が少し和らぎ、

構えていた腕が下ろされると同時におおっとざわめく声がした。

「何なの？」

「いえ、我々が何を呼び掛けても、いつも何も反応が無かったものですから」

その日の夜、エレナの部屋のドアを叩く音がした。

「どうぞ」

「失礼致します」

そこには研究員のリーダー格である男が一人立っていた。

「何の用かしら？」

エレナは眉を顰めた。

この男は悪い男ではないが、話が際限なく長くなるから疲れるのだ。

「率直に申し上げます。エレナ様、我々に協力して頂きたいのです」

「どう言う事？」

「イプシロンの事です」

「…とりあえず、話を聞きましょう。なるべく手短かにね」

彼の話は相変わらず長かったが、言いたい事は珍しくよく分かった。

「…つまり、私に彼のお目付け役になれと言う事かしら？」

適当な所で口を挟む。

「はい、お分かり頂けて幸いです。」

男が出て行く。

エレナは重労働から解放されたかのように軽く伸びをして、

用意していたお茶を口に運んだ。

エレナがイプシロンという事により、彼は目に見えて落ち着いた。

研究者達はイプシロンの精神が安定する事により、

研究しやすくなった事を喜んだし、

エレナも、ほとんど物を言わない、

静寂の化身のような彼と過ごすのは悪くない気分だった。

そんなある日、

エレナは研究員にある提案を持ちかけた。

「イプシロンを連れて行きたい所があるのよ。構わないかしら？」

「は、はあ」

エレナが彼を連れて行きたかった場所——それは海だった。

彼を乗せて車を発進させ、そして着いてすぐに車を降り、波の音に耳を傾ける。

「いつ見ても綺麗だわ、懐かしい音色ね…」

「…海…」

「あら、喋れるのね。どう？あの館より何倍も静かで心地いいと思わないこと？」

「…」

「イプシロン、あなた何も覚えてないんですってね」

彼はそうなるようコントロールされているのだから。

ただ、エレナはイプシロン計画を詳しくは知らなかった。

「あなたも捕らわれの身だけど、私も捕らわれの身なの。」
イプシロンが首を傾げた。

「静かに暮らしたいわ。」

不意にイプシロンは歩き始めた。

「適当に戻って来るのよ」

と、軽く声をかける。

それから浜辺に座り、オペラで歌う一節を繰り返し口ずさみながら
ぼんやりと海を見つめていた。

しばらくすると彼が戻って来て、握り締めた拳を目の前に突き出した。
てきた。

彼の意図が分かったので、両手をおわんのようにする。

彼が手を開くと同時に何かがこぼれ落ちて来た。

「私に？まあ、これは…」

それは、白や黄色の綺麗な貝殻や巻き貝だった。

「…大切にさせていたたくわ。」

それから数日後、唐突に、彼の姿が見えなくなった。

異変に気付いたエレナは近くにいた研究員をつかまえた。

「ちよつと宜しくて？」

「お嬢様、どうしました？」

「イプシロンはどこにいるのかしら？訓練場？」

「…いえ、彼は、失敗でした」

それだけ言うと研究員達はそそくさと去ろうとした。

「お待ちなさい、それでイプシロンはどうなったの？」

「それは、申し上げる事は出来ません」

「…そう」

不思議と何かを喪失したような気持ちになった。

だが数奇な運命に導かれ、エレナは再び「彼」と会う事になる…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1478b/>

間奏(イプシロン×エレナ)

2010年10月22日00時10分発行